

# 「押尾事件」の薬物事件に浮上する 「警察・検察」ハチンコ「怪人脈」



半途中で「押尾事件」を終わらせたい！

ば芸能界の実力者、警察や検察のOB、あるいはTさんが変死した六本木ヒルズのマンションの借り主、下着通販会社「ピーチ・ジョン」の野口美佳社長と親密な大物経済人などです」

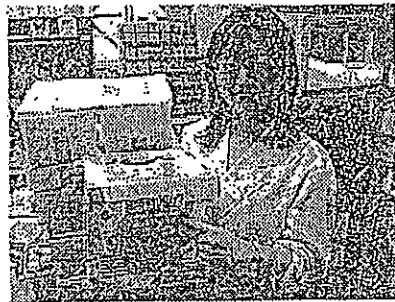
合成麻薬のMAMD使用で、麻薬取締法違反(使用)容疑で東京地検に起訴された俳優の押尾学被告(31)が関与した銀座ホステスT・Kさんの「全裸変死事件」。事件の中身はいまだ不透明だが、捜査の過程で浮上した大手事務所所属の有名アイドルのドラッグ疑惑捜査が打ち切られたとの情報も囁かれています。  
「捜査打ち切り説の根拠は所轄の麻布署だけでなく、警視庁の上層部など各方面から圧力が加かったとの話の流れからです」  
そう話すのは、事件を取材するマスコミ関係者。  
「事件の周辺にはアイドルタレント以外にもさまざまな人物が浮上しています。たとえば

また、押尾被告の後見人とされるパチンコ・パチスロ業界の黒幕、投資家A氏もその一人。A氏は芸能界の実力者と連携し検察や警察の関係者と接触し、押尾事件の早期幕引きを画策したという。  
「野口社長に火の粉が降りかからないように経済界の重鎮が検察関係者に懇願したとの話まで出ています」  
そう話すのは大手芸能事務所

六本木ヒルズのマンションの部屋に押尾やTさんと一緒にいたという話まで流れていますが(同)  
押尾事件の場合、警視庁は事件発覚直後から「(変死に)事件性はない」として、「のり

「ピー事件」とは一線を画している。しかし、圧力をかけられたという不名誉なウワサを打ち消すためにも、変死したTさんの遺族が納得する捜査結果を期待したい。  
(本多 圭)

## トマトをかじって考えてみる 日本のハチで農業が変わる？



ほかざた繁殖センターの綾部さん。ハチナマルの巣箱を持ってクロマルのマル八ナバチを日本各地のマル八ナバチを育てている。板橋区立エコポリス一丁目03-5970-5001

マルハナバチ(以下セイヨウ)。蜜を出さないトマトやナスの花の授粉に好適で、年間約15万匹が輸入されている。

だがアメリカトも大きい。セイヨウはミツバチと違って輸入検疫が緩く、ダニや寄生虫、ウイルスなどが入ってくる。また気性が荒く、

トマト、ナス、イチゴ、メロン、サクランボ、キュウリ。ハチの授粉により、ハウス栽培の野菜・果物が安価に安い実を結ぶようになったが、同時に知られざる深刻な問題もはらんでいる。  
近年、農家に重宝されているのが欧州産のセイヨウオオ

ハウスから逃げ出すと日本在来のマルハナバチの巣を襲って取ったり、花びらをかじって「盗蜜」をするので花を枯らし、それらを食べる動物をも絶滅の危機に追いやつている。  
東京の「板橋区ホテル飼育施設」はホテル研究の傍ら、6年前から在来種のクロマル

ハナバチ(以下クロマル)に着目。飼育と生産技術を確立して、農業団体や行政と組んで日本初の純国内産クロマルの実用化にあたつてきた。  
「クロマルは小家族だけど、セイヨウより扱いやすく働き者。逃げ出しても生態系を壊さないし、授粉を果たした後も殺す必要がない。日本のハチで農業を変えようと思いましたが」と研究員の綾部斗清さん(31)は話す。問題は年間8カ月も休眠することだが、綾部さんらはわずか3〜7日に短縮する方法を開発。生態系を乱さず一年中ハウス内で授粉作業ができるようにした。  
現在、クロマルの製品化は武蔵野種苗園(本社・東京)と石川県能登町で行い、今年2月、全国の農家に出荷を始めた。綾部さんの上司で同施設長の阿部宣男さん(53)は「米、麦、カナダではセイヨウが全面輸入禁止です。日本も今後そうなるでしょう」と言う。そのために日本各地のマルハナバチを繁殖させ、現場に戻そうとしている。地道な努力が、いずれ大きく花開くに違いない。  
(南條廣介)